

『一人の笑顔のために』

立志式に思う『人間にとってもっとも大切なのは・・・』

東日本大震災から11年が経過した3月11日、2年生の立志式が行われました。

私の挨拶では、はじめに東日本大震災東日本大震災当時4歳だった「愛海（まなみ）ちゃん」の話を紹介しました。

愛海ちゃんは迎えに来た母親と自宅に戻った瞬間、津波に襲われました。両親と2歳の妹は引き潮にさらわれ、行方不明になられたそうです。愛海ちゃんだけが、背負っていた通園用のリュックが漁に使う網に引っかかって助かりました。内陸部に住む祖母が、愛海ちゃんを自宅に避難させたいと考えましたが、愛海ちゃんは「ママが帰ってくるまでここで待ってる」と言って聞かなかったそうです。そして、「パパから電話かかってくるかな」と、電源を入れたままにしている父の銀色の携帯電話を握りしめていたのだそうです。「ママに手紙を書く」と言い出した愛海ちゃんが、こたつの上にノートを広げ、色鉛筆を持って1文字1文字、「ママへ。いきてるといいね。おげんきですか」と1時間かけて書き、そこまで書いて疲れたのか、すやすやと寝入った様子が報道されていたのを忘れることができません。

2万2000人以上が犠牲になられた東日本大震災。愛海ちゃんと同じような思いをどれだけの方々が経験されてきたのだろうかと11年経過した今も考えさせられます。

立志式では、多くの保護者の皆様にも参加いただき、一人一人の生徒が「立志の誓い」を発表しました。保護者の皆様の大きな愛や支えがあったからこそ、ここまで成長できたのだと考えています。

以前道德の授業で、『一粒の豆』という題材を扱ったことがあります。その題材文の最後には「人間にとってもっとも大切なのは・・・」という部分があります。

「人間にとってもっとも大切なのは・・・」 皆さんはどう考えますか？

『一粒の豆』

私は一粒の豆を自分の生き甲斐にしている母親を知っている。その母親には二人の息子さんがいる。この一家に悲劇が訪れたのは上の子が小学3年、次男が小学1年のときである。父親が交通事故でなくなったのだ。誰に責任があるかはっきりしない事故だったが、最後には、亡くなられた上に加害者にされてしまった。母親は、事故の責任をとるため土地も家も売り払わねばならず、残された母親と子ども二人は文字通り路頭に迷うこととなった。

各地を転々とした後、やっとある家の好意にすがって、その家の納屋の一部分を借りた。三畳ぐらいの広さの場所にムシロを敷き、裸電球を引き込み、七輪を一個、それに食卓と子どもの勉強机を兼ねたミカン箱一つ、粗末なフトンと若干の衣服・・・これが全財産であった。まさに、極貧の生活である。

お母さんは生活を支えるために、朝六時に家を出て、まず近くのビル掃除をし、昼は学校給食の手伝い、夜は料理屋で皿洗い、一日の仕事を終えて帰ってくると、もう十一時、十二時。だから一家の主婦としての役割は、上のお兄ちゃんの方に全てかかってきた。

そんな生活が半年、八ヶ月、十ヶ月と続いていくうち母親はさすがに疲れ果ててしまった。ロクに寝る間もない。生活は相変わらず苦しい。子どもたちも可愛そうだ・・・申し訳ないけれど死ぬしかない。二人の子どもといっしょに死んで、お父さんのいる天国へ行こうとそればかり考えるようになった。

ある日、お母さんは鍋の中に豆をいっぱいひたして、朝でがけにお兄ちゃんに置き手紙をした。

「お兄ちゃん、お鍋に豆がひたしてあります。これをにて、こんばんのおかずにしなさい。豆がやわらかくなったらおしょうゆを少しいれなさい。」その日も一日中働いて本当にくたびれ切ってしまった母親は、今日こそ死んでしまおうと、こっそり睡眠薬を買って帰った。二人の息子はムシロの上に敷いた粗末なフトンで枕を並べて眠っていた。

お兄ちゃんの枕元に一通の手紙が置いてあるのに気がついた。お母さんはなにげなしに手紙を取り上げた。そこにこう書いてあった。



(お兄ちゃんからの手紙)

お母さん、ボクはお母さんの手紙にあったように一生けんめい豆をにました。豆がやわらかくなったとき、おしょうゆをいれました。でも夕方それをごはんのときに出してやったら、お兄ちゃんしょっぱくて食べられないよといって、かわいそうに、つめたいごはんに水をかけて、それを食べただけでねてしまいました。

お母さん、ほんとうにごめんなさい。でもお母さん、ボクをしんじてください。ボクはほんとうに一生けんめい豆をにたのです。お母さんおねがいです。ボクのにた豆を、一つぶだけ食べてみてください。そして、あしたの朝、ボクにもういちど、豆のにかたをおしえてください。だからお母さん、あしたの朝は、どんなに早くてもかまわないから、出かける前にならぬボクをおこしてください。お母さん、こんやもつかれているんでしょう。ボクにはわかります。

お母さん、ボクたちのためにはたらいているのですね。

お母さん、ありがとう。

でも、お母さん、どうかからだをだいじにしてください。

先にねます。おやすみなさい。

母の目からどっと涙があふれた。

「ああ、申し訳ない。お兄ちゃんはこのように小さいのに、こんなに一生懸命生きていてくれたんだ。」そして、お母さんは、真夜中に、子どもたちの枕元に座って、お兄ちゃんの煮てくれたしょっぱい豆を涙とともに一粒一粒をかみしめて食べた。

たまたま袋の中に煮ていない豆が一粒残っていた。お母さんはそれを取り出して、お兄ちゃんが書いてくれた手紙に包んで、それから四六時中、肌身離さずお守りとして持つようになった。

もし、あの晩、お兄ちゃんが母親宛の置き手紙を書いてなかったとしたら、この母子たちはたぶん生きていなかっただろう。一遍の手紙、一粒の豆が三人の生命を救ったのである。しかもそれだけではない。母親は気を取り直していっそうよく働き、その働く母の尊い姿を見つつ育った二人の兄弟は、貧乏のどん底でも決して絶望することなく、よく母親の手伝いをし、勉強をした。それから十数年の歳月が流れた。お兄ちゃんも弟さんも明るく素直で母親思いの立派な青年に成長し、ともに世の教育ママたちが憧れている一流の国立大学を卒業し、就職した。

塾に通ったわけではない。夜は暗くなると電気代を節約するため早く寝なければならないような生活だった。生育環境は劣悪そのものである。そんな生活の中でいったい何がこの兄弟に作用したのか。

それはたった一つ、母親が毎日を一生懸命に生きたことだったのである。それだけである。その母親の後を子どもたちは小さな足で一生懸命ついてきた。

人間にとってもっとも大切なのは・・・